

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

牧田裕美

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム特任研究員

【研究題目】

社会運動の過程に関する研究—ボリビアを事例として

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、地域の社会構造によって、そこで発生する社会運動の展開にどのような差異が生じるのかを、ボリビアの水資源に関する社会運動の事例から明らかにする。水資源に関する世界的関心は高く、SDGsをはじめ多くの試みが各国でなされている。水資源をめぐる争いは歴史上頻発しておりその形態も多様である。新自由主義的政策下では、水道事業が民営化されたことで、生活を支える水へのアクセスが困難となる状況を生み出し、特に貧困層はその影響を強く受けたため、人々の生活に寄り添った解決のあり方が求められている。このような状況下で、ボリビアでは水資源をめぐる争いを3度成功させており、それらは暴力的展開、平和的展開、動員なき成功を示し、水へのアクセスを取り戻した。これは世界各国における水へのアクセスを失いつつある人々の道筋となりうる。そのため本研究では、ボリビアの事例をもとに、運動組織の用いるフレームと、それが市民にどう受け入れられたのかによって、3つの異なる運動の展開を示したことを明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

まず、現地調査によって運動家がどのようなフレームを提示したのかを明らかにする。まずメディア分析を行う。当時の新聞、声明文、内部文書、現地専門家の書籍によって、運動家がどのようなフレームを提示していたのか、市民がそれに対してどのような反応を示していたのかを確認する。次に、運動家と市民にインタビュー調査を行う。運動家に対しては、新聞や声明文で報じられていたフレームの内容について、それを自覚的に行っていたのか、もしくは市民の反応や政府の抑圧などの介入に応える形でフレームを提示していたのかを問う。さらに、運動の際に掲げられていたスローガンとその背景から、運動をいかに解釈していたのか、それによっていかにフレームを構築しようとしたのかについて質問を行う。市民に関しては、当時の新聞から市民がどのような言説を示していたのかを確認し、近隣住民との関係など市民が置かれた環境も含め、なぜ運動に参加するようになったのか、その背景に運動のフレームがいかに関与していたのかを明らかにする。

次に、現地調査で得られた資料から、以下3つの事例の比較分析を行う。第一は、2000年にコチャバンバ市で生じた第一次水戦争である。同国史上最大規模の動員数を記録し、運動の目的である「民営化の撤回、および水道法の改正」を達成したという意味において社会運動の成功事例として論じられている事例である。第二が、首都ラパスに隣接するエルアルトで生じた第二次水戦争である。同事例は、1997年に水道事業が民営化され、2004年に運動が生じ、2007年に終結した。第一次水戦争が短期的かつ暴力的だったことに対して、第二次水戦争は長期的かつ平和的だったことが特徴である。第三が、協同組合によって水道サービスを提供しているサンクルスの事例である。同地域は、「南米で最も成功した水道協同組合」として世界銀行に言及されるほど質の高い水道サービスを提供している。なぜ、同一国内で、水道事業の管理・運用という同一のアジェンダに対して、なぜ社会運動組織は異なる形態を選択したのか、各地域の歴史的背景の差異を

示す。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究の目的は、地域の社会構造によって、そこで発生する社会運動の展開にどのような差異が生じるのかを、ボリビアの水資源に関する社会運動の事例から明らかにすることであった。ボリビアにおける水道事業運営に関する３地域の比較分析によって、以下３点が明らかとなった。第一に、東部サンタクルスにおける地理的優位性が明らかとなった。東部サンタクルス県は、天然ガスを含む鉱物資源の埋蔵量が豊富であり、その収益の一部を協同組合の建設に充てることができた。第二に、各地域の水道事業体が設立されたのは、1960年代後半から1970年代前半であり、その時期がほぼ同時期であることが判明した。第三が、水道事業運営に関して利害関係を訴える組織が、サンタクルスにはないが、コチャバンバとエルアルトには存在することである。コチャバンバとエルアルトの各地域において社会運動組織が提示するフレームが異なるため、それに呼応するように、それぞれの運動が暴力的か、もしくは平和的な形相を示すのかという差異が生じた。一方で、本研究では、なぜサンタクルスには水道事業運営に関する利害関係組織が生まれなかったのかを迫ることができなかつたため、今後の課題としたい。